

【松前街道 油川】

油川は、中世から続く「外ヶ浜」を代表する湊町です。浪岡の北畠氏の「御所」から大豆坂(まめざか)を越える街道も、この油川と堤へ抜けていました。江戸との交易のために東廻り航路の湊として青森が開かれたあとも、油川商人の力は衰えず、北前船が沖に停泊して荷を積み下ろしたといえます。



越して熟成させる「三年味噌」の赤味噌が特徴で、北海道にも売られていました。三浦味噌醸造元がもっていた船の船印などが残っています。

浄満寺の円空仏(釈迦如来坐像) 6



津軽地方の円空仏は観音菩薩坐像が多いのですが、浄満寺の円空仏は釈迦如来坐像です。蛇(なた)で大胆に削った跡が残っていること、仏が微笑んで見えることなど、円空仏の特徴を現しています。梵珠山元光寺の菩薩坐像と共通する特徴があり、北海道から秋田へ向かう途上の作と考えられています。円空仏の拝観には事前申し込みが必要です。

森山弥七郎供養碑 7



浄満寺境内を「かのどやま(観音堂山)と呼びます。この供養碑は、青森湊の開港奉行・森山弥七郎を顕彰するため、寛文6年(1666)に寺内野に建立されました。昭和10年(1935)の飛行場建設で野木和公園に移り、昭和23年にこの「かのどやま」に遷されたものです。

油川に伝わる伝承では、弥七郎は油川湊を存続するよう尽力しました。3代目弥七郎が油川湊目付を務めていたことから、このような伝説が生まれたのかもしれませんが。油川湊は米や酒を松前に船積みし、大坂や越前から木綿・砂糖・紙などの荷が降ろされていました。

伝奥瀬氏五輪塔 8

浄満寺本堂の裏手に小高い茂みがあり、ここに天明飢饉の供養塔と並んで、いくつかの五輪塔があります。寺に伝わる場所では、この五輪塔は油川城主であった奥瀬(おくせ)氏の墓だといえます。油川城は浪岡御所の北畠氏の支配下にありましたが、天正13年(1585)または18年に大浦右京亮(津軽為信)が攻めてきたとき、城主である奥瀬善九郎は南部氏の領地に逃れたと伝わっています。

天明飢饉供養塔 9 ※推定

天明の大飢饉のとき、天明3~4年(1783~84)の2年間に、津軽地方全体で81700人あまり、油川でもおよそ1500人が亡くなりました。浄満寺には、このうち800人を埋葬する「千人塚」が作られ、供養塔が建てられています。



旧円明寺跡 10

真宗大谷派法涼山円明寺は、真宗大谷派遍照山法源寺とともに、中世の油川大浜にありました。近江などから来た油川の商人の多くは、浄土真宗の「有徳人」です。円明寺は、明応8年(1499)、源頼政の13代裔(すえ)にあたる念西房宗慶(源宗時)が開いた、と伝えられています。慶長16年(1611)の弘前築城にもなって弘前城下に遷されました。この縁起からしても、まったく時代が合わないのですが、源義経の一行が油川にあったこの寺に落ち延びてきたという伝説があります。弘前の円明寺には「弁慶の大般若経」や「弁慶の笈」が伝わっており、寺宝となっています。

イタリア館 11



イタリア人ジョセップ＝ファブリーは、大正5年(1916)に油川で缶詰を作り始めました。「フランコイタリアン会社」といいます。当初は民家を借りて生産していましたが、2年後の大正7年、木造の工場とレンガ造りの事務所兼住宅を建てました。ファブリーが作っていたのは、鯛・鮪・マルメロ・グリーンピースの缶詰で、イタリアと東南アジアに輸出していました。ファブリーは、この缶詰工場と同時に、寺内野で牛馬鶏を飼い、トマト・ジャガイモ・グリーンピースを栽培しています。現在は、個人の住宅であるため、敷地内は見学できません。ファブリーの墓は、油川の浄土真宗明誓寺にあります。

油川熊野宮 1

「熊野山十二所権現」を祀る社で、宮司の澤田家に伝わる「由緒書」によれば、澤田家の初代は「大永のころ」(1521~27)「西国辺りより当国へ」下り、2代目から神職を勤めています。「弘治のころ」(1555~57)北畠家の祈願所となりました。



伝馬町 2

羽州街道が油川湊に入る手前に伝馬町があります。この伝馬町の先で、奥州街道と交叉しています。浪岡から山越えた大豆坂街道の一方の分かれが、伝馬町に至る手前の新城で羽州街道に合流しているため、油川湊はどちらの街道からも荷が集まり、また運ばれていきました。油川湊は戦国時代にはすでに賑わっていたと思われ、奥大道に沿って油川派宿が形成されていたと考えられています。伝馬町は、この油川派宿をもとにして藩政時代に出来た大浜の町のひとつともいわれています。

羽州街道追分 3

羽州街道は、西田酒造の前で奥州街道(と松前街道)に合流します。江戸時代は、この先に湊役所までの道がありました。油川大浜の



湊は、油川川の河口にありました。

西田酒造 4



（綿屋）西田三郎右衛門は、油川後潟両組大庄屋です。ほかの多くの油川の商人と同じように、近江商人でした。屋号から、北前船が上方から運んでくる綿や呉服などを商っていたものと思われる。津軽や南部の造り酒屋の多くは、このような商人から起こっています。造り酒屋としての創業は、明治11年(1878)でした。「田酒」「喜久泉」を造る蔵元です。

西田酒造の「こみせ」 4



「こみせ」とは、商店が軒先を出し合って、雨風や雪を避けて歩けるようにした、アーケードです。「こみせ」は、弘前や黒石をはじめ、五所川原や木造(きづくり)など、津軽の街にはいたるところにありました。とくに、雪の降る季節には、まことに便利なものです。しかし、町並みが近代化されて次々に消え、今では貴重な風景になっています。西田酒造の「こみせ」は、バス停がここにあることから椅子も置かれ、現在も昔ながらの機能を果たしています。

三浦味噌醸造元 5

創業は明和8年(1771)。糴を用いる技術は、北前船で移り住んだ商人とともに、湊町から街道を伝わりました。津軽味噌は、二夏を

